
戦艦「大和」の生きる道

宗政

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦艦「大和」の生きる道

【Nコード】

N8342H

【作者名】

宗政

【あらすじ】

戦艦「大和」・・・世界最大のその戦艦は日本海軍、そして大艦巨砲主義の象徴として生まれた。これは太平洋戦争を戦った艦魂・大和、そして彼女と共に戦う連合艦隊の艦魂たちと彼女らを支える人間たちの物語

第一話・戦艦「大和」(前書き)

にわか仕込みの艦魂小説です・艦魂のお話が無理な方は閲覧をご遠慮なさることをおすすめします(――)

作者の足りない知識での執筆ですので至らない点が多々あると思いますが、生暖かい目で見守っていただくとうれしいです

第一話・戦艦「大和」

西暦1941年12月16日、彼女は就役した

戦艦「大和」・・・後に戦艦の代名詞となる世界最強の戦艦の誕生である

遡ること9日前、呉軍港

就役前の最後の公試運転を終え、港に帰港した彼女・・・大和

「私いつになったら外の海に出られるんだろう？それにこんなにたくさんの憲兵さんに囲まれるのも・・・」

ドックに入渠した自分自身を見ながら戦艦大和の艦魂・大和はつぶやいた

彼女のことは最高機密で軍上層部でも一部の人間しか彼女のことを知らない

「もうしばらく我慢してくれ。一週間もすれば正式に就役することになる」

「技官さんっていつもそればかり・・・」

彼女は頬を膨らみながら言った。この大和担当の特務技官・斎藤哲哉海軍少佐は艦魂が見える数少ない人間である

「まあそうなのだが・・・でも今回は一週間って初めて時間が出てきたんだから少しは信用できるだろ？」

「自分で少しって言ったら駄目ですよ」

斎藤少佐は一本取られたという風な感じに頭をかいた

「特務技官殿。少しよろしいですか？」

技術担当の兵が言った

「ああ、すぐ行く」

先ほどまでの親身な感じから一変し、軍人らしい顔つきになり返事をした。当然、兵には彼女の姿は見えていない

「早く済ませて、戻ってきてくださいね」

大和は少し不満な顔をし、それを見た斎藤少佐は口ばくで『またな』と言った

「もうこんな鉄の壁の中にいたくない・・・早く遠くの海に行きたい・・・そういえば私、妹いるんだよね。技官さんに聞いてみようかな。」

自身の艦首に座りながら呟いた。そして彼女は我慢できず、早速斎藤少佐に妹のことを聞こうと彼の部屋へ行った

「え・・・妹？まいったな、大和は知っていたのか」

斎藤少佐の様子に首をかしげながらも大和は聞いた

「その反応はいるってことだね？どんな娘？名前は？」

「仕方無い・・・彼女の名前は『武蔵』だ。今はこれだけで我慢し

てくれ。それに話で聞くよりはちゃんと会って確かめた方がいいだ
ろ?」

「・・・うん。今は名前だけでもわかればいい。ありがとう」

第一話・戦艦「大和」（後書き）

ご意見・ご感想などお待ちしております> m (——) m <

第二話・開戦

翌日の朝、大和が入渠しているドックや付近の軍施設は早朝にも関わらず騒がしかった

しかし定期点検もなく、また公試運転もすべて終了した大和にとって今日は休日である

「こんな朝早くから騒がしいな．．．どうしたんだろ」

艦橋のさらに上にある主砲測距儀のてっぺんから降りて甲板で話をしている技術兵たちの会話に耳をすました

「とうとう米国と開戦か．．．」

「真珠湾にいた太平洋艦隊は壊滅したらしいぞ」

「空母機動部隊か、山本長官の博打が当たったってことだな」

「しかしこれで米艦隊は無力に等しくなったな」

「我が神国日本の力を見せる時が来たのだ！」

「そつか、戦争始まつちやったんだ．．．私ってば戦艦なのになぜだか嬉しくないな」

西暦1941年12月8日

南雲忠一中将率いる赤城、加賀ら6隻の主力正規空母から成る空母機動部隊はハワイ オアフ島真珠湾に停泊する米海軍太平洋艦隊を奇襲した

数百機以上の攻撃隊は停泊する太平洋艦隊に壊滅的打撃を与え、主力たる戦艦は8隻中2隻を撃沈、残るすべての戦艦にも大破ないし中破の被害を、その他巡洋艦・駆逐艦にも相当な被害を与えた。また港湾施設、基地施設、真珠湾基地航空隊にも多大な損害を与えた

しかし、山本五十六連合艦隊司令長官が示した本作戦の主目標である正規空母3隻は湾外にいたために被害を免れていた

世界初の空母機動部隊による奇襲攻撃で、日本と米国は戦闘状態に突入した

「太平洋戦争」の勃発である

第二話・開戦（後書き）

ご意見・ご感想などお待ちしております。m (_____) m <

第三話・戸惑いと出会い（前書き）

第二話が短かったことをおお詫びします>m（——）m<
話の切りがよかったのであの長さになってしまいました；

第三話・戸惑いと出会い

「こいつも戦場に行くのか・・・」

ドックの整備デッキから眺めていた斎藤少佐が言った

「戦艦ですから、戦うことが仕事です」

背後から聞こえた声の方に振り向くと大和が立っていた

「開戦のこと聞いたのか」

「私のいたところで話されちゃ、いやでも聞こえてきます」

「それもそうだな」

斎藤少佐は苦笑しながら言った

「そうだ、いつになるかわからないが今のうちに伝えておこう」

大和は斎藤少佐の言葉に首をかしげた

「正式に就役したら、お前は連合艦隊旗艦として第一戦隊に配属だ」

「連合艦隊旗艦・・・ですか？でも旗艦って長門姉さんですよね？」

「現在の旗艦は長門だが、お前は海軍の象徴だ。お偉いさんに言わせたら、その象徴艦である大和が連合艦隊旗艦にならずにどの艦になる・・・ってことだ」

「でも・・・私、長門姉さんに一度も会ったことないのに・・・」

斎藤少佐は大和の戸惑い何か言いたそう目を見て、察した

「わかった。長門は今広島に停泊しているし、長官への大和の経過報告って形で乗艦できるかもしれない。その時に私から長門に大和の気持ちを伝えておこう。直接話したことはないが、何度か見たことはあるから見ればわかる」

「・・・はい、ありがとうございます」

広島湾 連合艦隊旗艦・戦艦『長門』

「斎藤哲哉少佐、呉より大和の経過報告に参りました」

「まあ、かけたまえ」

失礼しますと言いながら斎藤少佐は椅子に座った

彼の提出した報告書を眺めるのは山本五十六連合艦隊司令長官その人である

「・・・ふむ、概ね順調だな」

「はい、就役なれば必ずや大和は連合艦隊の、そして日本の力になりますように」

一通り読んだ報告書を閉じ、テーブルに置くと山本長官は口を開いた

「なあ斎藤少佐、なぜ私にこれを？連合艦隊司令長官という職に就いてはいるがこういうもんは海軍省の役目じゃあないかな。それともこの長門に乗艦したかった理由でもあるのかな？」

「はっ・・・それは・・・」

斎藤少佐は凶星と言わんばかりに戸惑ってしまった

「あはははは。少佐には博打はできんな。考えや感情がすぐ顔に出てしまう。で、乗艦したかった理由は？」

この人には隠しごととはできないと悟った斎藤少佐は言った

「長官は艦魂というものを？」

「もちろん知つとる。それに私は艦魂が見えるぞ。少佐もか？」

山本長官の目は新たな友人を見つけたように嬉しさに満ちていた

「はい。それで大和が長門に伝えたいことがあるとのことで、今回このよう形で参上した次第です」

「ふむ。・・・長門、いるか？」

山本長官が言うと彼の背後から白い第二種軍装に身を包んだ一人の女性が現れた

「お呼びですか？山本長官」

「紹介しよう。こちらは大和建造担当特務技官の斎藤哲哉少佐だ。」

少佐、彼女が長門だ」

「斎藤です。長門の艦魂とお会いできるとは光栄のいたりです」

斎藤少佐はおもむろに立ち上がり敬礼した

「長門型戦艦一番艦 長門です。こちらもお会いできて光栄です、斎藤少佐」

長門も続いて敬礼をした

二人のやり取りを見てから山本長官が言った

「ここではいつ人が来るかわからん。甲板で話そうじゃないか」

山本長官の提案に二人は賛成し、三人は甲板へ向かった

第三話・戸惑いと出会い（後書き）

ご意見・ご感想などお待ちしております。m (_____) m <

第四話・長門の気持ち（前書き）

このくらいのペースで更新できればいいですね；

第四話・長門の気持ち

三人が甲板に出ると心地よい潮風が吹いていた
初めに口を開いたのは長門だった

「斎藤少佐。それで私にお話とは？」

「はい。山本長官と長門は連合艦隊旗艦の件、ご存じでしょうか？」

「うむ、話は聞いておる。大和が就役したら旗艦をこの長門から大和に移譲するということだったな」

「はい。私は長官からお聞きしました」

山本長官に続いて長門も、旗艦の話は知っているようだった

「そうですか。それを大和に話したら長門のことや他の艦艇のことを心配していました」

「心配……ですか？」

「連合艦隊旗艦という大役に就役したばかりの自分であってもいいのか、これでは長門をはじめとした連合艦隊各艦に申し訳ない……
というのが大和の気持ちです」

「……」

「あはははは。大和はなんとも仲間思いのいい子ではないか、なあ長門」

まさに呆れたと言わんばかりの表情の長門とそんな長門とは裏腹に
笑い声をあげる山本長官の二人である

「仲間思いなのは結構なことですけど・・・このわずかなお話で、大和とは人が好過ぎる印象を受けます」

大和への率直な感想を言った長門。その言葉には一抹の不安が感じられた

連合艦隊全艦隊の頂点に立つこの役目をそのような状態でこなせるはずがない、長門は心中で強くそう思ってしまった

「山本長官のおっしゃる通りいい子ですよ、大和は。とても世界最大の戦艦とは思えない程に」

斎藤少佐の言葉は大和を理解しきっている重みが感じられた
それに続いて長門は斎藤少佐に聞いた

「斎藤少佐、この後は呉に？」

「はい。大和の就役を見届けるまでが特務技官である私の仕事です」

「では大和に。私や他の艦のことは気にすることはない。あなたはあなたの役目を全うすることに全力を注ぎなさい。なによりあなたには連合艦隊全艦がついているということを忘れず、頼ってくれていいと伝えてください」

連合艦隊旗艦という役目をこなすだけはある。そして大和を支えることが旗艦を譲る自分が次にすべきことなのだと、長門の言葉にはそれだけの重みがあった

「必ず一言一句間違えずに伝えます」

しばらく三人は長門の甲板で談笑して、山本長官が斎藤少佐に言った

「ところで少佐。君は艦政本部の所属かな？」

不意に山本長官が斎藤少佐の所属を聞き、少佐はすぐに答えた

「はっ、艦政本部・第四部は造船部の所属になります。大和建造に伴い艦政本部から呉鎮守府に出向という形になっています」

「ふむ。少佐は艦隊勤務に就くのはいやかね？」

それを聞いた山本長官は予想もつかないようなことを言った。

「艦隊勤務ですか？しかし、私は艦隊勤務の経験がほとんどありません」

「経験などこれからいくらでも積めるじゃないか。私は君が気に入ったよ。君さえよければ連合艦隊司令部に来ないか？」

山本長官の申し出に斎藤少佐は心底驚いてしまった。連合艦隊司令部とは海軍の実質的な前線司令部である。参謀出身の人間ならば必ず所属したいと願う部署の一つである。

「私を連合艦隊司令部にですか？しかし、私は一技術将校に過ぎませんし、あるのは造船関係の知識だけです。とてもお役に立てられるかどうか」

「大和建造に携わっていたのだ、十分優秀だと私は思うがね。それに造船の知識とは船をよく知っているということだろう。長門はどう思う？」

「はっ。斎藤少佐は技術将校としてとても優秀な御方だと思います。何より司令部には艦のことを理解している人間を少しでも多く、据えるべきかと」

これには艦をただの兵器としてではなく、海軍の、そして日本の一部と見てほしいという長門の気持ちがこめられていた

「長門もこう言っということだ。すぐに返事をしてくれとは言わんから、ゆっくり考えてみてくれ」

「はっ・・・御厚意に感謝します。長官」

第四話・長門の気持ち（後書き）

ご意見・ご感想などお待ちしております。m (____) m <

第五話・喜びと苦悩（前書き）

遅くなりました・私生活でちょっとごたごたがあり、遅れてしまいました

大和より長門に力を入れて書いてしまっているような気がしないで
もないです；

第五話・喜びと苦悩

呉軍港、大和建造ドック

広島から戻った斎藤少佐は、呉鎮守府長官への報告を終えるとすぐに大和の下へ行った

「変わらず・・・だな」

斎藤少佐がつぶやくと、目の前の『大和』の甲板から大和が降りてきた

「おかえりなさい」

「ああ、ただいま」

どこかそわそわしながら大和は斎藤少佐に聞いた

「あの・・・長門姉さんには・・・」

「大和の気持ちを伝えたから心配するな。それと長門からの伝言だ」

そうして斎藤少佐は長門から大和への言葉をそのまま伝えた

「長門姉さんがそんなことを・・・」

大和は驚きの反面、嬉しさが表れた表情をした

「ああ、だからお前は何も心配することはないんだぞ」

「はい・・・ありがとうございます・・・斎藤さん・・・」

「礼を言われるほどじゃないさ。それと山本長官から連合艦隊司令部にこないかと、誘われたよ」

「連合艦隊司令部に？」

「ああ。どうやら山本長官も艦魂が見えるらしく、それが理由かはわからないが気に入られてしまったよ」

「じゃあもし私が連合艦隊旗艦になったら・・・」

「司令部は大和に移る・・・当然司令部要員である私も大和に乗艦するってことだな」

「ずっと一緒にいられるんですね」

頬を染めながら大和は呟いた

「ん？何か言ったか？」

何か聞こえたようで斎藤少佐は大和のほうを振り向いた

「いいえ、なんでもありません」

大和は笑顔で言っただけの甲板へ飛び移った

広島湾 戦艦『長門』甲板

長門は艦首から広島湾に停泊する艦隊を見ていた

「どうかしたか？」

「・・・長官」

長門を思い詰めた顔のまま山本長官に敬礼をした

「お前がそんな顔をしとる時は何か思い詰めている時だな」

「お見通しですか」

一呼吸おいて、長門は話し始めた

「真珠湾での一件です」

「ふむ、それで？」

「真珠湾の米太平洋艦隊を撃滅したのは、戦艦の大口径砲ではなく赤城たちの空母艦載機です」

山本長官は頷きながら聞き続けた

「長官は予てから航空機の優位性を軍令部首脳部に説いておられましたが、今尚軍令部の傾向は戦艦や水雷戦隊を主軸にした艦隊決戦です。戦艦である私にとってそれは願ってもないことですが・・・」

長門は戦艦である自分の役目と、時代の流れによって海戦の主役が戦艦などの大型艦から空母艦載機に移り始めていることを知っての苦悩に板挟みにされていた

「お前の言いたいことはわかっている。今回の攻撃で航空機の優位性が証明された。だがこれで大西少将や山口少将、そして私を含め

た航空主戦論が軍令部の大半を占める大艦巨砲主義の将官や参謀たちを圧倒できるかもしれん」

「……」

その言葉は戦艦である長門にとって自分の存在意義を問いたくなる言葉でもあった

山本長官はさらに続けた

「空母機動部隊を主軸にした戦略を用いていけば、艦隊決戦は必要最小限に抑えられる。それだけ艦を失わずに済むようになる」

「しかし……」

長門が言おうとすることを遮るように山本長官は続けた

「もちろん、一方が無傷で済むほど戦争が甘いものだとは思ってはおりんよ。航空機の攻撃力は侮れない、我が艦隊も損害を被るは必定だ。それでも私はできるだけ多くの艦を生かしてやりたい。それが連合艦隊司令長官として私のすべきことだと思っておるよ」

山本長官の言葉に長門は涙ぐんでしまった

「……長官。その御言葉は他のみんなにも言ってあげてください」

もちろんさと言いながら、山本長官は手を振りながら『長門』の艦内へ入っていった

「……はあ、私ったらまた……」

長門はため息混じりに言ってまた海を眺めた

第五話・喜びと苦悩（後書き）

ご意見・ご感想などお待ちしております。m (____) m <

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8342h/>

戦艦「大和」の生きる道

2010年10月11日01時05分発行